



平成28年5月26日
佛教大学附属幼稚園

雨つぶはおまんじゅう型

園長 藤堂俊英

田植えが終わり野山を逆さまに映す水田から、カエルの声が聞える季節となりました。今年も無事に秋の実りが迎えられるよう声援を送らずにおれません。間もなくやって来る梅雨は暑い夏に備え水分をたっぷりと補給する、自然にとっても私たちにとっても、なくてはならない時節です。何かの本の中で、空から降る雨は地球に雨が降り始めてから、たしか、60万回以上も循環を繰り返した雨だという話を読んだ記憶があります。そうした雨水の大冒険の歴史を子どもたちに伝え、「今日の雨は大昔に恐竜さんの頭に降ったことのある雨かもしれないね」という話をしたところ、「今日の雨を頭にかぶってみたい！」という恐竜ファンの男の子がいて、少し慌てたことがありました。武鹿悦子(ぶしかえつこ)さんに「雨つぶ」という次のような詩があります。

知らなかった

雨つぶは なみだのような 「しずく型」ではないんだって
雨つぶは ひらたく まあいい 「おまんじゅう型」なんだって
ああ だから 天からのおまんじゅうを 木も草も だいすき



雲の中の水滴はある程度の大きさ(直径 0.2 ミリくらい)になると落下し雨粒になります。初めは表面張力で球形をしていた水滴も落下を始めると上昇気流や空気の抵抗を受け、変形してお饅頭のように下が平らになり、もっとスピードが増すと美味しい餡(あん)が抜けたような上下逆さの凹型になり、さらに変形が進むとバラバラになって小さな球形になるのだそうです。草や木が口を開けて？天からのお饅頭型の雨つぶを待っている姿を想像すると、鬱陶しい梅雨の慰めになりそうです。

ところで「栗花落」と書いて「つゆり」と読むのだそうです。しかも人名と聞くと驚きます。梅雨のうす暗さの中で咲く花は、ウノハナやドクダミのように白い花が目立ちます。栗の木は甘い匂いを放つ白い花を房状につけます。ちょうど梅雨の雨だれに歩調を合わせるかのように小さな花が散ります。そんな風情に由来する名前なのでしょう。しかし親枝にしっかりと掴まり留まった花は虫などの力を借りて受粉し、イガで自分を守って秋の実りを迎えます。

親枝といえば進化論で有名なダーウィンの『種の起源』に一枚だけ挿入されている図を思い浮かべます。それは「自然選択(淘汰)」の章に出る系統樹を表したものです。その樹には私たちが習った生物の名前はまだ書き込まれていませんが、ダーウィンはその樹を「生命の大樹」と呼んでいます。花も虫も人もお饅頭型の雨つぶに育まれた壮大な生命の大樹につながる一枝一枝です。花を見ては摘まずにおれない子どもたち、虫を見ては捕まえずにおれない子どもたち。ひょっとするとそれは生命の大樹に触れようとする、少々荒っぽい無意識の行動なのかもしれません。そんな時にこそ、種子づくりのために虫や風をじっと待つ花の姿、空腹を満たす食物を捜し求める虫たちの姿を伝え、いのちのいとよみの懸命さに気づかせてあげれば、いのちを大切にする共感の芽が生まれるはずですよ。